

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00438

研究課題名（和文）差異の受容 - ニュージーランド文学から見たキリスト教とマオリ宗教の弁証法的融合 -

研究課題名（英文）Acceptance of Differences; Dialectic Fusion of Christianity and Maoritanga depicted in New Zealand Literature

研究代表者

澤田 真一（Sawada, Shinichi）

弘前大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：30250624

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）： ニュージーランドの先住民族マオリにキリスト教の伝導が開始されたのが1814年であり、宣教師トマス・ケンドールがマオリ宗教に魅了され解任された時に、ニュージーランド「生得権」（マオリと白人が互いの文化の霊的な源泉を受け入れ合うことにより、新たなものが創造されえた可能性）は失われたと歴史家シンクレアは語る。

本研究は、キリスト教とマオリ宗教を有機的に結合させることでこの「生得権」を回復し、ニュージーランド社会の物欲的な物質中心主義と、冷酷な個人主義を克服し、慈愛に満ちたマオリと白人の共同体社会を創り出そうとした詩人ジェームズ・バクスターの思想と実践を解き明かす。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ニュージーランドは差異に起因する様々な問題を他の英語圏国家、キリスト教国家とは異なり、対話を通じて克服することで、多文化・多民族が共生できる有機的な社会を構築してきた。本研究は、そのような国民の成熟した平和意識の根底には、先住民族マオリの多神教的自然宗教とキリスト教の世界的に極めて稀有といえる弁証法的な融合が存在することを文学の視点から解明した。特にマオリと白人が遭遇したときに失われた「生得権」とは何かを明らかにし、その失われた「生得権」が回復されていくプロセスを文学作品の解釈を通じてたどった。この研究は日本が多文化を受容していく過程で参照すべき示唆を含むと考える。

研究成果の概要（英文）： It was 1814 when Christianity was introduced to the Maori, and when Thomas Kendall, a missionary, was dismissed because he was obsessed with Maoritanga, New Zealand lost the birthright, a chance to create something new by combining two cultures, says Keith Sinclair, a historian.

This research tries to depict the thoughts and practices of James K. Baxter, who tried to redeem the lost birthright, thereby overcoming greedy materialism and ruthless individualism of New Zealand society.

研究分野：ニュージーランド文学

キーワード：ニュージーランド文学 マオリ文学 キリスト教 マオリタンガ

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

サミュエル・ハンチントンの『文明の衝突』(1996年)以後、テロ行為の頻発により、異なる文明(宗教)に属する集団間の関係は「敵対的である」との見方が主流を占めるようになり、特に一神教であるキリスト教とイスラム教との間での、宗教的不寛容・否定・差別・排撃が顕著となっている。ニュージーランドでも、過去のイギリス政府の植民地政策の過程において、ヨーロッパ的(キリスト教的)価値観とマオリ的価値観との相克から国内最大の内戦である土地戦争(1860年~1872年)が勃発し、国土は荒れ果てた。しかしながら、そのような荒廃の中からマオリ宗教とキリスト教を融合した実践的な思想が生まれ、マオリによる新約聖書の教えを取り入れた非暴力不服従運動パリハカや、国民的カトリック詩人ジェームズ・バクスターによる伝統的なマオリ社会を模したコミュン活動に結実していった。

多様な宗教の対立問題に関しては、ジョン・ヒックが比較宗教学の立場から、それぞれの宗教の共通項を基盤に他者の領域を侵すことなく共存を図ろうとする「宗教多元主義」の概念を提示している。しかしながら、マオリと白人がそれぞれ他者の宗教を包摂することで、自らの宗教が抱える問題を乗り越えていこうとした歴史的な試みは、ともすれば他宗教への無関心に陥りがちなヒックの宗教相対主義的な解決策以上の可能性を有している。

文学は、時代精神や社会規範の表出であるとともに、それらに異を唱える抵抗の道具ともなる。ニュージーランドにおいては文学が哲学的な思考を担ってきたことは先に述べたが、マオリ宗教とキリスト教の弁証法的な融合を文学から読み取る作業は前例がなく、共生社会構築の鍵を探るうえで大きな意義を持つものと考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究は、ニュージーランドの白人作家、マオリ作家および混血の作家たちが、文学史という歴史の流れの中で文学作品を通じた対話と応答を繰り返すことで、マオリ宗教とキリスト教を弁証法的に発展させていった過程を丹念にたどり、そこから生まれ出た多文化共生の思想がどのように国民的なアイデンティティの形成に影響を及ぼしていったのかを明らかにする。

### 3. 研究の方法

#### 2019年度

本研究の実施計画に基づき、2019年にはニュージーランドに赴いて調査研究をするとともに、研究資料の収集を行った。

2019年9月10日から2019年9月22日にかけて、オタゴ、ウェリントン、オークランドを訪れた。オタゴでは、オタゴ大学を拠点として同大学図書館とホッケン・ライブラリーを活用した。また、同大学のハルコ・スチュアート先生からは研究についての助言をいただいた。ウェリントンでは、テ・パパ博物館において、主に先住民族マオリの歴史・文化についての調査を行った。ニュージーランド政府外務省職員のチャーリー・ロウ氏からマオリ文化・マオリ産業についてのお話を伺うこともできた。オークランドでは、オークランド大学、オークランド工科大学、オークランド市図書館を利用して研究および資料収集をした。

さらに、当該年度後半には、2019年に収集した資料、書籍、データを活用して、研究課題である文学から見たキリスト教とマオリ宗教の弁証法的融合を解明するための準備的な研究を行った。旧植民地国家として、同化政策の中で抑圧されてきたマオリ文化・宗教が回復していく過程を、マオリ作家ウィティ・イヒマエラの作品群の再解釈から読み取った論文「父なるものの埋葬 - ウィティ・イヒマエラの『タンギ』再考 - 」を執筆した。

## 2020 年度

研究初年度にニュージーランドに赴き、大学・図書館・博物館等で収集した資料を読み解き、査読論文「父なるものの埋葬 - ウィティ・イヒマエラの『タンギ』再考 - 」を発表した。(日本ニュージーランド学会誌第 27 巻、2020 年 11 月 20 日、pp.20-31)

ニュージーランドを代表するマオリ人作家ウィティ・イヒマエラの小説『タンギ』(1973)を取り上げ、物語の主人公タマ・マハナの 30 年後の姿を描いた『人間の縄』(2005)とイヒマエラの自伝『マオリ・ボーイ』(2014)を比較研究することで、従来とは異なる新たな物語の解釈を試みた。1970 年代にマオリ作家たちが、白人主導の二文化主義の下でどのような制約下にあったかを明らかにし、出版を可能にするために物語の深層に真のテーマを秘めざるをえなかった状況について言及し、父の葬儀という表向きのプロットの象徴的な意味を明らかにした。

物語は従来白人批評家たちに解釈されてきたような政治色のない牧歌的な作品ではなく、ヨーロッパ系白人の入植、植民地化、同化政策に対する異議申し立てであり、今まで否定・抑圧されてきたマオリタンガの再生を宣言し、さらにその上にこそ築くことのできる多文化主義国家を希求するものである。

## 2021 年度

本年度は、研究初年度にニュージーランドに赴いて行った資料収集及び研究で諸事情により明らかにできなかった欠落部分を補うために、再度海外で調査を行うことを計画していた。しかしながらコロナ禍の中でニュージーランド政府は感染拡大防止のため外国人の入国を一切許可しなかったため、望んでいた入国はかなわなかった。そのため研究期間の延長を申し出て、その認可を得ることができた。

本年度は、初年度にニュージーランドで収集した限られた資料、データを利用した研究を国内で行った。論文の執筆の完成は次年度に回すこととしたが、今までの科研費による研究を通じて得た研究成果を用いて、『オセアニア文化事典』(丸善出版)のために執筆依頼を受けていたニュージーランド文学部分(特にマオリ文学)についての原稿を仕上げ提出した。『オセアニア文化事典』の出版は 2024 年中の予定である。

現時点では、マオリ文学についての研究はおおむね完了しており、ニュージーランドの白人作家たちが、いかなる理由から、いかなる方法で、どの程度までマオリの宗教や価値観を自分たちの作品内に取り込み、キリスト教西洋の価値観との有機的な融合に成功しているかについての研究を主に行っている。その中でも特に、実生活においてもマオリ的な価値観を実践し、社会のアウトサイダーたちを無条件で受け入れるコミュニティを作った、カトリックの詩人ジェームズ・ケア・バクスターの研究に力を入れている。

## 2022 年度

ニュージーランド政府が外国人の受け入れを開始したため、当該年度は春季休暇期間を利用し、2023 年 3 月 15 日から 25 日まで、ニュージーランドでの研究および最終的な資料収集を行った。概要は以下のとおりである。

### 1. ダニーデン (3 月 17 日~3 月 20 日)

15 日に青森空港から出発し、シドニー空港、クライストチャーチ空港を経由して 17 日にダニーデンに午前 7:15 に到着した。その日のうちに協定校であるオタゴ大学を訪問し、日本語学科のハルコ・スチュワート先生と異文化理解と交流について、Paola Voci 先生とはポストコロニアリズムについて、Hayashishita 先生とは異文化と言語の関係についてお話をし、ニュージーランドのポストコロニアル文学研究について多くの示唆をいただいた。ダニーデン滞在中は、Dunedin Public Art Gallery、University Book Shop、Paper Plus、Whitcoulls 等で研究に必要な資料や書籍を収集した。

### 2. オークランド (3 月 20 日~3 月 25 日)

20 日の夜にオークランドに到着した。21 日にはニュージーランド海洋博物館でキュレーターの Jaqui Knowles さん、地元で活躍する日本人芸術家 Kazu Nakagawa さんとお会いして、ポストコロニアル社会の重要なテーマの一つである「移住」について意見を交換した。在日ニュージーランド大使館からの紹介で実現した対談であったため、日本での作品展示の可能性についても話し合った。オークランド滞在中は、オークランド市民図書館を中心に市内の書店や second hand book shop をめぐり、研究に必要な資料や書籍を収集した。

## 2023 年度

ニュージーランドは、「差異」に起因する様々な問題を「対話」を通じて克服することで、多民族・多文化が共生できる有機的な社会を構築してきた。本研究は、そのような平和意識の根底には先住民族マオリの多神教的自然宗教と白人入植者が持ち込んだキリスト教との世界的に極めて稀有と言える弁証法的な融合が存在することを文学の視点から解明することを目的とする。

2023 年度は研究の最終年度として、研究成果を論文「失われた生得権の回復：ジェームズ・ケア・バクスターにおけるキリスト教とマオリタンガの統合」としてまとめ、日本ニュージーランド学会に提出した。なお、本論文は査読審査を終え、2024 年 6 月に『日本ニュージーランド学会誌』第 31 巻に掲載されることになっている。本論文では、マオリへのキリスト教宣教開始時にまでさかのぼることで、ふたつの宗教の相克から、時代を経てマオリと白人が互いの文化の

霊的な源泉を受け入れ合うことで、新たなものが生み出されていくプロセスを、歴史家キース・シンクレア、キリスト教宣教師トーマス・ケンドル、白人詩人ジェームス・バクスター、マオリ詩人ホネ・トゥファールらの言説をもとに紐解いた。

なお本研究の他の成果として、丸善出版の『オセアニア文化事典』（2024年出版予定）では、「マオリ文学」について執筆している。また、2024年6月開催の日本ニュージーランド学会研究大会（於：弘前大学）公開シンポジウムでは、パネリストとして研究成果を発表する。

#### 4. 研究成果

論文「失われた生得権の回復：ジェームズ・ケア・バクスターにおけるキリスト教とマオリタングの統合」は査読審査を終え、2024年6月に『日本ニュージーランド学会誌』第31巻に掲載されることになっている。

ニュージーランドの先住民マオリに対して、キリスト教の伝道が公式に開始されたのは1814年である。最初の宣教師トーマス・ケンドルの解任は教会には異教への敗北ととらえられたが、歴史家シンクレアの評価はそれとは異なる。詩「ある宣教師への追悼（‘Memorial to a Missionary’）」において、彼は想像力を自由に飛翔させ、ニュージーランドの辿りえたもうひとつの未来の姿から、過去のケンドルの解任劇について彼独自の決定的な評価をくだす。ケンドルがマオリ世界の中で見出したのは「身体（肉）」と「精神（霊）」、そして「人間」と「自然世界」の調和であった。それゆえに白人植民者たちが解任されたケンドルに背を向けたときに、ニュージーランドの生得権はとこしえに失われてしまったと考える。「生得権（birthright）」とは「マオリ（兄）とパケハ（弟）が互いの文化の霊的な源泉を受け入れあうことにより、何かしら新たなものが創造され」えた可能性のことである。この「生得権」をめぐる、本論文は、キリスト教とマオリタングを有機的に統合させることでこの「生得権」を回復し、ニュージーランド社会の物欲的な物質中心主義、冷酷な個人主義、そして自然で人間的な喜びを剥奪するピューリタニズム的な倫理観を乗り越え、慈愛に満ちたマオリとパケハの共同体社会を創り出そうとした詩人ジェームズ・ケア・バクスター（James Keir Baxter, 1926-72）を取り上げ、彼の思想、彼の実践について詩、論考、自伝等の資料をひもときながら詳しく論じ、それらに基づいて、彼の代表作のひとつである「マオリのイエス（‘The Maori Jesus’）」（1966）の新たな解釈を試みた。本論考は、白人の側から民族の境界を越えてマオリの領域に入り、白人文化にマオリ文化を融合させた稀有なケースの研究として日本の学会、また日本を訪れているニュージーランドを代表する芸術家 Robin White から（公開シンポジウムにおいて）評価された。近い将来日本が多文化主義の採用を余儀なくされる際に、異なる文化同士との融合的な発展の可能性を扱った本研究は貢献すると思われる。

2024年6月15日開催の日本ニュージーランド学会研究大会（於：弘前大学）公開シンポジウムでは、パネリストとして「マオリとケアの思想」と題して研究成果を発表した。シンポジウムのテーマは「ケアを中心とした社会の構想に向けて」であり、誰もが持つ人間としての「弱さ」を考慮せず、「生産性」や「能力主義」にのみ価値を置く社会に、はたして私たちは自分の「居場所」を見つけることができるのかについて疑問を呈し、西洋とマオリの価値観を活かしあうことで紡ぎ出されてきたニュージーランドの「ケア」の思想と実践に触れることで、いつまでも自分らしく生きていくことが出来るオルターナティブな社会の構想を試みた。発表においては、命の力 mauri の概念を中心に、マオリ式のあいさつ hongiri を通じてお互いに豊かな命を与え合う人間関係の上に築かれたマオリコミュニティで涵養されていった愛 aroha、誇り mana などの徳

目が説明され、コミュニティライフにおけるケア的な主体とはいかなる存在であるかを明らかにした。西洋の個人主義を潜り抜けた新しいマオリのコミュニティ主義についての本発表は、行き過ぎた日本の個人主義の弊害を是正するうえで一定の示唆を与えるものと考えられる。

また、今までの科研費による研究を通じて得た研究成果を用いて、『オセアニア文化事典』（丸善出版）のために執筆依頼を受けていたニュージーランド文学部分（特にマオリ文学）について原稿を仕上げ提出した。『オセアニア文化事典』の出版は2024年10月の予定である。本事典の出版は、ニュージーランド文学、及びマオリ文学を広く日本の読者に紹介するものになると思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 澤田 真一	4. 巻 27
2. 論文標題 「父なるもの」の埋葬 - ウィティ・イヒマエラの『タンギ』再考 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本ニュージーランド学会誌	6. 最初と最後の頁 20-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------